



## 衣川に新しい生活様式を導入

# 菅原新一

菅原新一は、旧衣川村（現在の衣川区天田）で、父久米蔵と母ハツの長男として、一八九六年（明治二十九年）二月二十六日に生まれた。体は小さかったが力持ちで、しかも気のきくはたらき者であった。

新一は、十八歳の時に両親を説得して宮城県石巻市の高級料理店に板前修業に出た。新一は七年間という長い期間、持ち前のまじめさと器用さで、すばらしい技術を身に付け衣川に帰ってきたのである。

その昔、源義経夫妻が何度も訪れたという衣川の名所「天田滝（菊の滝ともいう）」のそばに居酒屋を開いた新一は、衣川での活動を始めた。板前としての評判が高く、居酒屋はかなり繁盛している。

その後、新一は四十六歳になった一九四一年（昭和十六年）から、当時めずらしかった新しい生活様式を、衣川の人々のために取り入

れようと努力し始めた。それは高圧動力電線と電話、定期バスの三つであった。

同年、新一は米作りが盛んな衣川地区に、大きな精米・製粉工場を作ろうと考えた。そのためには、多くの電力が必要である。そこで、何もかも物不足の太平洋戦争の時代に、高圧動力電線を衣川に引くことを決意した。地域の有力者や電力会社の友人の協力をもらいながら、三年後の一九四四年（昭和十九年）に実現させ、新しく建てた精米所も動き始めたのであった。

また、衣川の多くの人々が電話を使えるようにしようと、新一は努力した。一九五一年（昭和二十六年）、新一は村内に電話を設置する組合長となり、最初の三年間だけで七十四の家に電話を設置した。その後も新一の始めた運動は引き継がれ、一九六七年（昭和四十二年）、衣川すべての家に電話が引かれたのである。

電話を設置する運動と同時に新一が取り組んだのが、衣川の定期バスの運行である。岩手県南バスの一関営業所に働きかけ、一九五二年（昭和二十七年）、衣川の古戸と平泉を結ぶバスの運行が始まった。新一は、バスの運行が始まってからも、バスの運転手の休む場所や泊まる場所を用意するなど、バス会社への協力をし続け、三年後の一九五五年（昭和三十年）には、古戸よりさらに奥にある南股

や北股までバスの路線を開通させることができた。

電力と電話、バス、この三つの新しい生活様式の導入は、新一が四十六歳から十五年間も運動をし続け実現したものである。なぜ、このような当時難しいことを成し遂げることができたのか、彼の子ども達は、新一の人柄を次のように語っている。

一、もともと世話好きで、頼まれた事は自分のこととして精を出す人でした。

二、他人から助言を得ることが上手な人でした。

三、何事によらず潔癖だったから、他を恐れることがありませんでした。

四、好奇心が強く、だれもやらないことやりたがる人でした。

五、七年間の板前修業で、他人とつきあう方法を身に付けており、耳からよりも口からだによく言っていました。

三つの新しい生活様式の導入を衣川で実現した新一は、七十三歳になった一九六八年（昭和四十三年）の五月二十五日、心臓の発作におそわれ、家族みんなが見守る中で、惜しまれながら亡くなりました。

#### \*参考文献

『郷土の発展に尽くした胆沢・江刺の先人物語』

胆沢・江刺先人物語の会

